

ロシアの改革と挫折 クリミア戦争の敗北はロシア社会に大きな衝撃を与えた。 クリミア戦争は No.130

1) 支配階級は「上からの改革」に着手した。ニコライ1世 位1825-55はクリミア戦争中に急死し、子のアレクサンドル2世 位1855-81が即位。クリミア戦争で、産業革命を達成した英仏軍の圧倒的な火力、迅速で十分な兵站、兵の士気の高さなどを目の当たりにして、遅れたロシアを何とかしなくてはならないと皇帝は思った。(1863年以降反動化し、革命派のテロで暗殺されることになる)

皇帝【1: 】※は、1861年、【2: 】を発し、一連の改革に着手した。1864年、県と郡に自治を認めた。

【2】によって、人口の3分の1以上を占める農奴は法的には自由身分となったが、農地分与は有償で、多額の「買い戻し金」の支払いを担保するため、多くの場合土地は【3: 】(農村共同体)に引き渡された。簡単には自営農民にはなれず、債務のため離農もできず、直ちに自由な労働者になれる例は少なかったが、自営農民が初めて登場し、ロシア資本主義の出発点となったとされる。「農奴が解放され、自由な労働力が多数生まれた結果、工業化と資本主義化が進んだ」と記述している教科書もある。アレクサンドル2世は、フランスなどの外国資本に頼りながら、軽工業を中心に資本主義化を進めた。内政改革として導入には至らなかったが、皇帝権力の制限に至りうる権力分立構想があった。09H  
しかし、1863年のポーランドの反乱をきっかけに、反動化し、専制政治を復活させた。

※アレクサンドル1世 位1801-25は、ナポレオンのモスクワ遠征を撃退したこと得名高い。クリミア戦争を始めたニコライ1世はデカブリストの乱を鎮圧した。その子がアレクサンドル2世。

2) 1870年代(既にアレクサンドル2世治世後半の専制政治復活期)、学生、知識人の間に【4: 】が起きる。この名称は、スローガンの「【5: 】(人民の中へ)」から来ている。

ナロードニキ運動は、人民に苦しみをもたらす資本主義とツァーリズムを批判し、専制政治と戦うことを呼びかけるが、マルクス主義運動ではない。ロシアの【6: 】(農村共同体)※に古くからあった相互扶助の伝統をもとにして、専制政治さえ取り除けば、独自の平等な社会(一種の社会主義社会)を実現できるとするものだった。「ミールを基盤とする社会主義」と表現している教科書もある。農民の啓蒙と決起を期して多くの【7: 】(知識人層)が農村に入って啓蒙活動をしたが農民の心をつかむことはできず、厳しく弾圧され、ナロードニキの多くはシベリアに流され、運動は1880年代を最後に衰退した。ナロードニキが逮捕される現場を描いた絵もある。

アナーキズム(無政府主義)、【8: 】(虚無主義)、テロリズムは、これ以前からあったが、ナロードニキ運動の挫折により、それらの影響が急速に広がったことを覚えておこう。特にテロリズムは皇帝、政治家の暗殺を計画・実行し、アレクサンドル2世も暗殺された!

※ミール(ロシアの農村共同体)古くからの自治組織。農奴制の下では、租税や賦役の連帯責任を負い、農地の割付まで行っていた。農奴解放後もミールは残され、地主から土地を購入した代金(買い戻し金)の支払い、土地の共同利用などの責任を負うことになった。これでは勝手に離村することすらできない。なお、大きな業績を残した旧ソ連の宇宙ステーション「ミール」(1986.2.20建造。2001.3.23大気圏突入焼滅)は「平和」という意味。ロシア語「ミール」(мир)には「世界」という意味もある。「争いのない協調的な農村共同体」ミールに由来すると考えられている。

【参考】『はてしなき議論の後』(抜粋) 石川啄木 1886-1912 ナロードニキ運動から約40年後の1911年の作品  
われらの且(か)つ読み、且つ議論を闘(たたか)はずこと、  
しかしてわれらの眼の輝けること、  
五十年前の露西亜(ロシア)の青年に劣らず。  
われらは何を為(な)すべきかを議論す。  
されど、誰一人、握りしめたる拳(こぶし)に卓(たく)をたたきて、  
'V(ヴ) NAROD(ナロード)!'と叫び出づるものなし。  
此処(ここ)にあつまれる者は皆青年なり、  
常に世に新らしきものを作り出だす青年なり。  
われらは老人の早く死に、しかしてわれらの遂(つひ)に勝つべきを知る。  
見よ、われらの眼の輝けるを、またその議論の激しきを。  
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、  
'V NAROD!'と叫び出づるものなし。

《復習》以下の条約名と年代は丸暗記せよ!

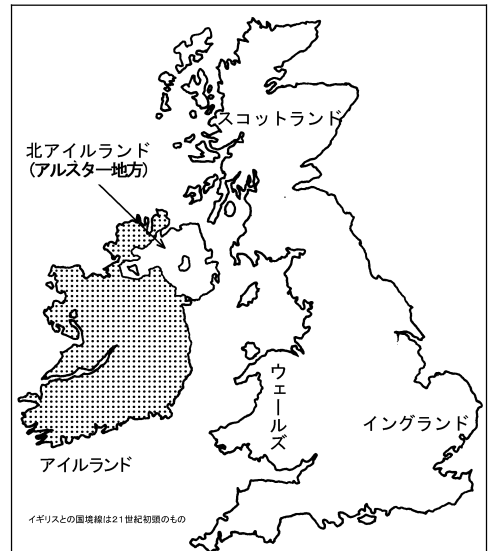
ギリシア独立戦争	アドリアノーブル条約(1829)、正式にはロンドン会議(1830)
第1次エジプト=トルコ戦争	ウンキヤル=スケレッシ条約(1833)
第2次エジプト=トルコ戦争	ロンドン四国条約(1840)、五国海峡協定(1841)
クリミア戦争	パリ条約(1856)
ロシア=トルコ戦争	サン=ステファノ条約(1878) → ベルリン条約(1878)

3) クリミア戦争後、ロシアは内政に専念し、イギリスもインド大反乱の対応に追われ、他のヨーロッパ諸国も国内問題の解決に集中せざるをえなかった結果、1870年代頃まで、列強体制の規制が緩み、各国が列強の干渉から相対的に自由な環境にあった。そのため、イタリア・ドイツなどで国家統一をめざす戦争が起きた。No.133~135も概ねこの時期のヨーロッパのできごとである。

## アイルランドのナショナリズム

大英帝国の繁栄、規制緩和、選挙法改正などについてはNo.129参照。

- 1) 法的には1603年以降、両国は同君連合だったが、実質上、アイルランドは1649年、【9: 】に支配されて以来、イギリスの植民地にされた。イギリスは18世紀末、アイルランドに独自の議会を認めたが、イギリス系のプロテスタントの地主が支配していた。産業革命後は、イギリスに移住して労働者になる者も多く、イギリスでは彼らに対する暴動も発生している。
- 2) ウェールズは既に13世紀にイングランドに合併された。1707年、アン女王の時にイングランドとスコットランドが合同してグレートブリテン王国となった経過と、以下の史実との混同に注意せよ。  
1801年、イギリスはアイルランドを併合し、国名も【10: 】となった。住民はカトリックだから弾圧された。  
1829年まで※カトリック教徒には【11: 】さえなかった。1881年まで土地所有者となることもできなかった。  
※カトリック教徒解放法(1829)



- 3) 1828年、【12: 】廃止。これには【13: 】1775-1847らの運動があった。彼はアイルランドの政治家で1828年に下院に当選したが、カトリックであったため当選を拒否され、1829年のカトリック解放法成立で、はじめて下院に入った。
- 4) 1845～46年【14: 】が起き、アイルランド農民の苦難は続いた。ジャガイモの病気を原因とする凶作で、アイルランド人、百万人が死亡した。イギリス人によって土地を奪われたアイルランドの農民は小作農として麦の収穫のほとんどを小作料として納めていた。麦畑の間の僅かな土地に栽培するジャガイモが彼らの唯一の食料だった。数種類の品種を栽培してリスクを分散するどころではなかった彼らは単一品種のみを栽培し、それが病気になった。ジャガイモが全く収穫できないのに地主たちは麦の納入を強いた。目の前に食料があるのに、飢えて死んでいった。この時多くの移民がイギリスやアメリカに渡った。ケネディもこの時アメリカに渡った移民の子孫である。ビートルズの4人のメンバー中3人もこの時リヴァプールに渡った移民の子孫である。
- 5) 1848年【15: 】は、武装蜂起したが鎮圧された。  
1858年 秘密結社フェニアン結成 独立を要求  
1870年 グラッドストーン内閣 (自由党) 土地法制定 アイルランド人小作人の権利を認める法律  
1886年 グラッドストーン内閣 (自由党) アイルランド自治法案提出 イギリス人地主の反対で不成立  
この時、**ジョセフ=チェンバレン** 1836-1914 はアイルランド自治法に反対して自由党を離れた。保守党に移り、植民地相 任1895-1903 時代、帝国主義政策を推進して南アフリカ戦争を引きおこした。ナチス・ドイツへの融和政策で知られるネヴィル=チェンバレン首相は子息。第6代ケープ植民地首相セシル=ローズ 任1890-1896 との混同に注意。銃を背に両手に電線を持ってカイロとケープタウンを両足で踏む風刺画に描かれているのはセシル=ローズ。
- 6) 19世紀後半より、アイルランドではイギリスからの自治ないしは独立を求める運動が激しくなる一方で、アルスター地方を中心としてイギリスとの連合を維持しようとする勢力もあり、両者の衝突が続いた。1914年9月、【16: 】がイギリス下院で成立したが、第一次世界大戦の勃発で凍結された。
- 7) 1916年、独立派が「アイルランド共和国樹立」を宣言し、1916年4月、シン=フェイン党の支援を受けて「【17: 】」を起こすも鎮圧された。  
1918年の総選挙で独立を主張する民族主義政党、【18: 】(1905年結成)が勝利し、1919年に独立戦争が始まった。1921年、南部26州(南アイルランド)はイギリス国王を元首とする同君連合国家「アイルランド自由国」として分離独立(首相デ=ヴァレラ)、1922年イギリスもこれを承認した。1931年の**ウェストミンスター憲章**によりイギリス連邦の一員となっていたが、1937年、イギリスが連邦王国からの独立も承認、新憲法が公布され、国名を【19: 】と改称、共和制に移行した。1949年にイギリス連邦からも離脱した。
- 8) 独立時の経緯によりアイルランド島の北東部、北アイルランド6州(アルスター地方)はイギリスの統治下にあるが、エールは1998年のベルファスト合意以前は全島の領有権を主張していた。1973年にはEC(現在EU)に加盟した。北アイルランドではアイルランドへの帰属を求めてテロ行為を繰り返す過激派IRAなどナショナリストとユニオニストとの紛争が起こっていたが、平和プロセスが進み、北アイルランド紛争は1998年4月、ベルファストにおいてイギリスとアイルランド間で【20: 】が成立し、イギリスとの関係継続を求める立場のプロテスタント系住民と、南のアイルランド共和国との合同を求めるカトリック系住民双方が参加する自治政府(北アイルランド議会)が設置された。エールは【20: 】で北東部、北アイルランド6州の領有を放棄。

### もうひとつの「血の日曜日事件 (Bloody Sunday)」※

それは、1972年、北アイルランドのデリー(ロンドン=デリー)で起きた。1968年、北アイルランドではイギリスの支配に反対する公民権運動が起こり、1972年1月、イギリス軍が介入、公民権協会による平和的なデモに発砲、14名のカトリック市民がイギリス兵士に射殺された。この事件にはアイルランド共和国も激怒、ダブリンのイギリス大使館が焼きうちにあい、各地で抗議デモや報復、大混乱が多発した。これを契機にイギリスによる北アイルランドの直接統治が始まる。

楽曲『私の愛した街』(訳詞 横井久美子 原訳 平井則之 アイルランド抵抗歌)はこの事件のことを歌っている。また、有名な『ロンドンデリーの歌』は『Danny Boy』など様々な歌詞を付けられ、賛美歌としても有名で、英領北アイルランド(アルスター地方)の事実上の国歌である。著作権の関係上歌詞を掲載できないが、これらはYouTube等で試聴できる。

※ 世界史で頻出の本来の「血の日曜日事件」とは、1905年1月22日に、ロシア帝国の首都ペテルブルクで起きた。修道士ガボンに率いられた民衆の平和的な請願デモに軍隊が発砲、死傷者2000名を出した事件。